

横浜市小学校社会科研究会

学年部会

研修会記録

第 3 号

令和5年 9月 6日

横浜市小学校教育研究会

会長 濱田 哲也

横浜市小学校社会科研究会

会長 加藤 和之

同 学年部長 宮原 美由紀

【提案日時】

令和5年8月1日（火）

提案 比嘉 将来 先生（西富岡小）

【会 場】

フォーラム南太田

司会 倉方 一樹 先生（さちが丘小）

記録 松本 芽依 先生（都岡小）

【提案】

単元名「米づくりの盛んな地域～挑戦し続ける庄内の米づくり～」

【提案者より】

山形県庄内平野での米づくりを取り上げ、農家のSさんや、水田農業研究所で品種改良に取り組むHさんの話や図書資料を活用しながら、本気の学習問題である「Hさんたちが品種改良を続けていくことにはどんな意味があるのだろう」という問いに迫っていく単元

視点①子どもが問いや見通しをもち、主体的に学ぶ単元づくり

品種改良に取り組んでいる研究所のHさんのインタビュー

品種改良の難しさ
(費用・期間)

【本気の学習問題】

Hさんたちが品種改良を続けていくことにはどんな意味があるのだろう。

○成果

- ・学習方法の見通しを立てたり、学習問題に対するキーワードをあらかじめ整理したりすることで、子どもが主体的に学習に取り組むことができた。
- ・教室後方の資料スペースや、ロイロノート資料箱内にインタビュー動画や資料を用意し、子どもが自ら資料を選ぶことができた。そこから友達に説明するなどグループ内で自然と対話が生まれた。

△課題

- ・焦点化していくことが難しく、視点が広がりすぎてしまったり、話の中心がどこにあるのかわからなくなってしまうたりした。

視点②個を生かし、協働的に学びを深める授業づくり

○成果

- ・子ども一人ひとりの考えを見取ることで、意図的指名や効果的な問い返しにつながり、より社会的事象の意味に迫ることのできる話し合い活動になった。
- ・水田農業研究所のHさんや農家のSさんに着目することで、研究所の立場、農家の立場、消費者の立場の視点に立って、米づくりに関わる人々の工夫や努力を多角的に捉えることができた。

△課題

- ・調べてきたことを発表する活動では、子どもの説明する時間が長く、資料も次から次へと出ることによって、資料の読み取りや内容の理解に時間がかかる子どもにとっては、困難があった。
- ・品種改良について思考が広がっていき、焦点化が難しかった。本時では意見の発表にとどまってしまう、つながりに気づいたり、学習問題に対するまとめをしたりすることが難しかった。

【グループ協議】

協議内容

- ①個が主体的に学ぶ姿を生かしつつ、集団の中でどのようにまとめていくのか。
- ②本時の中で、より焦点化していくためには、どのタイミング・場面だったらよかったのか。

個の調べ学習をつなげていく支援

- ・調べたいことを自ら選択でき、情報へのアクセスも容易であったことから個の調べ学習が充実していた反面、本時が調べたことの発表にとどまってしまった。他グループとの関連性に気づいたり、自分たちの調べる内容を深めたりしていくためにも、グループ間をつなぐ教師の声掛けやロイロノートの提出箱機能を生かした他要素との結びつけや比較が必要だった。
- ・広く浅くなりがちな話し合いを改善するために、Hさんへのインタビュー資料は議論が煮詰まったときに後から全体で扱い、各要素と関連付けながら焦点化していくのがよかったのではないかな。

現場の声と児童の距離を縮め、同じ視点に立って考えるための手立て

- ・Hさんの「地域を守ることにつながる」の意味について議論するのであれば、資料を見ていない児童は話し合いの場に参加できないため、もう一度全体で動画を確認するべきだったのでは。
- ・より現場の声を大切に議論するのであれば、学習問題を「農家・地域を守ることにつながるとはどういうことだろう」とし、前時に全体でHさんのインタビューを扱ってもよかったのではないかな。
- ・農家の視点に合わせていくために、農業の大変さなどもインタビューで共有し、学級全体で同じイメージをもつことができるようにする。

学習問題の設定

- ・前時に日本の農業の課題について扱ったため、具体（庄内平野、Hさんの現状）なのか日本全体の話題なのか議論の視点が様々になってしまった。人にせまる学習をしていくのであれば、視点を整理して、再度全体で認識を確認する。

【担当校長先生、講師の先生方より】

瀬谷さくら小学校校長 場家 誠 先生

- ・「学校としての学び方」や「社会科としての学び方」を感じられる提案だった。
- ・児童の発言を見ていくと、この内容の発表を児童本人も聞いている児童も理解できているのかが気になる。タブレット端末を使った「個」の学びが、「孤」の学びにならないようにC17の発言を全体化できるといい。
- ・学習活動をA「話す・書く・読む」とB「聞く・考える・学ぶ」に分けた時、「調べる」はどちらに分類するか。Aは、第三者が見て判断できる活動。子どもが「何のために調べるのか」理解できていることが重要。
- ・提案資料のP16にある「ぐるぐるの図」は、社会科の「すべての事象がつながっている」考えにつながる。
- ・視点を焦点化するヒントは、「構造化」（順序や順位、項目など）にあるのではないかな。
- ・日本全国の5年生が「米作り」を学ぶ意義や自分たちとのつながりを考えさせる投げかけが必要になる。

玉川大学教職員大学教授 梅田 比奈子 先生

- ・子どもたちの発言の裏にある事実は、はっきりしていたか。学習問題が子どもたちのものになっていたのか。
- ・子どもたちの発言にSさんの営みが見えてこないのがもったいない。中心にSさんがいれば、具体的に捉えていくことができるようになるのではないかな。クラス全体で、そのイメージを共有することが大切。
- ・子どもの発言の裏を読み取ると、考えたことではなく調べた事実が多い。自分で仮説を作って、その根拠を調べるような活動をする、聞いている人を説得させようとして、考えが深まることもある。
- ・本時目標の言葉一つ一つに具体的な情報や事実があり、子どもたちもそれを捉えられると、もっとよくなる。
- ・板書を見ると、せっかく用意された大切な資料が消えてしまっている。見せ方を工夫したり、子どもたちの目に触れるようにしたりしておくとうい。（インタビューも内容を整理して示す）
- ・社会的事象について話し合うよさやその意味について考えられるように、このような素敵な実践から学びを深めていけるとよい。
- ・大切な資料は、板書や掲示物として残せるとよい。端末上では、消えてしまっても残らない。インタビュー内容も整理して、見せ方を工夫できるとよい。

文責 松本 芽依 (都岡小学校)

発 杉内 翔太 (川和小学校)